

本資料の著作権は江戸川カタック社に帰属します。無断での複製・転載・配布・引用・改変・転用を固く禁じます。© 江戸川カタック社（主宰：林広貴）

中級Ⅰ 吉祥神ガナパティ

理論篇では、まづインドという名前の由来、そしてカースト制度について学びます。

そして身分制についての知識を前提に、藝術理論の古典『ナーティヤ・シャーストラ』に現れた平等思想を一瞥します。

実践篇でははじめに足腰を強くしリズム感を鍛えるために、タタカールの練習法と演目をそれぞれひとつ学びます。

また片足でクルリと回る1足チャッカルに習熟するための連続トゥクラに進みます。

そしてヌリティヤの演目として、「水汲み」と「ガネーシャ・ステューティ」を学びます。

最後の神話篇では、インドで大人気、日本でもインドの神として例外的な知名度をほこるガネーシャの意匠と物語をさります。

インドという名前

インドに行くと肌が真っ黒なひとと、黒ではないが、白というほどには白くない、そんなナチュラルな小麦色の肌のひとがいることに気がつきます。

傾向としては、南に行くほど肌の黒いひとが多い。北には小麦色から白に寄った肌の色のひとが多い。

この傾向は人種的な差異にもつぎます。黒いひとたちは、およそ紀元前4000年頃と言っていますが、インド亜大陸に先に入ってきた、ドラヴィダ系の民族です。

小麦色から白系統のひとたちは、紀元前1500年頃に入ってきた、アーリア系の民族です。

アーリア系のひとたちがバラモン教という宗教をもってきて、支配層となった。やがて先住民族のドラヴィダ系のひとたちと混血が進んだ。

そうして宗教的にも一体化が進んだ。それをヒンドウ教と呼んでいます。中世に入るとイスラム教の王朝が支配しましたので、イスラム教徒もたくさんいます。

みんなインド人です。みんなインド人ですが、秩序を支える文化装置、また現在のインドのアイデンティティであるヒンドゥー教の原型はバラモン教ですから、

やはりアーリア人の文化を中心に見ていく必要があるでしょう。

インドという呼称も、アーリア人の言葉に由来します。山崎元一 著「古代インドの文明と社会」から引用します。

インドという名称は、実際にはアーリヤ人が「川」の意味で使っていた「シンドウ」という語に起源している。この語がのちに、かれらがインドで遭遇した

最大の川（インダス川）とこの大河の流れる地を意味するようになり、ついには外の世界のひとびとから亜大陸がこの名で呼ばれるにいたったのである。

中国書の「身毒」「印度」「天竺」、ペルシア語の「ヒンドウ」、ギリシア語の「インドス」「インディア」などは、シンドウの訛ったものである。

『ナーティヤ・シャーストラ』に見られる平等思想									
<p>上記のとおりカースト制度は現在公的には否定されていますが、周知のとおり、インドの階層社会は健在です。 2 0 0 0 年以上続いてきたシステムですから、それを変えるのにも同様の時間がかかるのでしょう。</p>									
<p>強固な身分制は不変である。が、人々に平等を求めるころが生まれないはずはありません。</p> <p>インドの人民は革命を起こさなかったかわりに、歴史上なんとか思想運動を展開しました。現実を変えないかわりに形而上の謀叛をくわだてた。</p>									
<p>ひとつはアーリア人支配が確立したあと、紀元前 5 世紀前後の仏教およびジャイナ教です。両宗教は階層性を前提するバラモン教に対する対抗運動として登場した。</p> <p>次は中世のバクティ運動です。「信愛」や「敬神」と訳されるバクティは、ヒンドウ教の完成のあとに登場した、最高的人格神への絶対帰依をうたう平等思想です。</p> <p>そして、近現代にいたるとガンディーの「サットィヤーグラハ（真理）」があります。ガンディーは真理のもとで宗教の別も階層の違いもないとした。</p>									
<p>実はインド舞踊も、このような平等思想が起源にあるのです。</p>									
<p>『ナーティヤ・シャーストラ』という演劇理論書があります。「演劇」としましたが、ここには舞踊や歌や詩などあらゆる藝術を含みます。</p> <p>「ナーティヤ」とはそのような藝術全般を指し、「シャーストラ」は教典という意味。成立年代は不詳で、紀元前 2 世紀から紀元 6 ～ 8 世紀頃と広く推定されています。</p> <p>インド舞踊にとっての最大の聖典であり、現在のすべてのインド古典舞踊が参照するものです。</p>									
<p>『ナーティヤ・シャーストラ』によれば、ナーティヤは神々のリーダーであるインドラの要請に応じ、造物主ブラフマーによって人類に与えられた「贈物」です。</p> <p>ヴェーダの教育は、再生族（バラモン、クシャトリヤ、ヴァイシャ）の上位三階級に限定され、シュードラはアクセスできなかった。</p> <p>この状況を憂いたインドラがブラフマーに、「シュードラにもアクセスできるヴェーダ」を求めた結果、ブラフマーは瞑想を通じて「第 5 のヴェーダ」の構想を得た。</p> <p>これが『ナーティヤ・シャーストラ』です。</p>									
<p>つまりカーストにかかわらず、芸術を通してすべてのひとが神聖な知恵に触れ、霊的完全性に到達できなくてはならないという思想を打ち出しているのです。</p> <p>インド舞踊に関わるひとすべてが立ち返るべき、原点の、平等思想と言えるでしょう。</p>									

[illegible]

1 足チャッカル／One Leg Chakkar／ एक पाँव की चक्कर									
片足でクルリと回るチャッカルです。連続して行くと非常に見栄えがするので、わかりやすい魅力があります。									
それだけに決めの場面でよく出てくるのでしっかり練習しましょう。しかしそればかりするとサーカスとか雑技団みたいになりますのでほどほどにすべきと思います。									
左足だけで回りますので、こればかり練習すると左の腰に負担がかかりますから体力に応じて練習しましょう。									
たくさん連続で回転するよりも、2回か3回綺麗に回れるほうがよほどよいのです。									
ここでは1足チャッカルを用いた8の連続したトゥクラを学びます。				ヌータン先生からは15の連続トゥクラを習いましたが、それはさすがに多いので、わたしが選抜しました。					
1				2					
Tat Tat Thai Thai Tigdha Digdig Thai ×3				Tigdha Digdig Tigdha Digdig ×2					
Tigdha Digdig Thai ×3				Tat Tat Thai ya Thai ya Kran					
				Tat Tat					
				Tigdha Digdig Tigdha Digdig Thai					
				Tigdha Digdig Tigdha Digdig Thai					
				Tigdha Digdig Tigdha Digdig Thai					
				1,2					
3 Dora Chakkar				4					
Tat Tat Tigdha Digdig Tigdha Digdig				Tat Tat Tigdha Digdig Tigdha Digdig					
Tat Tat Thai Tat Tat Thai Tat Tat Thai 1,2				Tat Tat Thai Tat Tat Thai Tat Tat Thai 1,2					
Tat Tat Thai Tat Tat Thai Tat Tat Thai 1,2				Tat Tat Thai Tat Tat Thai Tat Tat Thai 1,2					
Tat Tat Thai Tat Tat Thai Taa At Taa Thai				Tat Tat Thai Tat Tat Thai Taa At Taa Thai					
5				6 Dora Chakkar					
12 34 56				12 34 56 Kran Dha Kat Dha					
Kran Dha Kat Dha- Kat Kat				(A)Ka (A)Ta Ka (A) Ta					
Kran Dha Kat Dha- Kat Kat				Kran Dha Kat Dha					
Kran Dha Kat Dha- × 3				Dha dha Kida tak 2					
				Dha dha Kida tak 3					
				Dha dha Kida tak 4 1,2					
				× 3					
				3回目だけ最後に↓を追加。					
				Dha dha Kida tak Dha					

7				8			
Tigdha Tigdha	Thai	Tigdha Digdig	Thai	Taa Thai	Taa Thai	Taa Thai	Taa Thai
Tigdha Tigdha	Thai	Tigdha Digdig	Thai	Aa Thai	Aa Thai	Aa Thai	Aa Thai
Taa Thai	Tata Thai	Aa Thai	Tata Thai	Thai ta	Thai ta	Thai	Thai
Thai ta	Thai ta	Thai	Thai Thai	Tat Tat	gap	Tat Tat	Tigdha Tigdig
Tigdha Digdig	Thai	×3	Taa	ek	do	teen	char
Tigdha Digdig	Thai	×3	Taa	panch	cheh	saat	aath
Tigdha Digdig	Thai	×3		nao	das		
水汲みのガット・バーヴァ／Gat bhav／गत भाव							
「gat（歩みや動き）」と「bhava（感情や表現）」を合わせてガット・バーヴァという演目です。							
使われる語はアマッドと同様に"Ta Thai Thai Tat Aa Thai Thai Tat" のみとなります。							
パニハリ（Panihari）という主題がとても有名です。パニハリとは「水を運ぶ人」という意味です。							
ラードガが川や井戸で水を汲みにいくシーンを演じますその足の動き（ガット）が美しい。							
水を汲んで帰っていくのですが、いたづらなクリシュナが現れて、壺を壊します。							
なぜこういうものが長く愛され、重要とされ、舞踊の主題となるのか。							
それは「日常を愛する」ということです。							
水を汲むという行為は極めて普遍的で人類が常に行ってきたことです。それは楽しいことです。							
そして子供がいたづらして壺を壊してしまうのもよくあることです。子供はかわいいものです。							
そうした日常を美しく描き、愛そうではないか、ということで舞踊の主題となっているのです。							
ガネーシャ・ステューティ／Ganesh Stuti／गणेश स्तुति							
「ステューティ」は「讃歌」とか「賛美」という意味で、神への祈りと称讃をあらわす演目です。公演の冒頭に演じられることが多いです。							

ガネーシャは日本でも有名な顔が象の神様で、障碍を取り除く吉祥の神として人気があります。							
shubha ghali pradhama Ganesh manao × 4	吉祥のとき、まづガネーシャを讃えなさい。						
man`gala jyoti jagão jalão × 3	吉祥の光を灯し、輝かせよう。						
shubha ghali pradhama Ganesh manao	吉祥のとき、まづガネーシャを讃えなさい。						
pūjo prathama Shri Gana Laya× 2	最初に聖なるガネーシャを礼拝せよ。						
rakshate hain saari jag ki vo laj	全世界の障害を取り除く者として顕現するガネーシャに。						
shrat Tha shishya jhukao jhukao	皆が頭を垂れて崇拝せよ。						
shubha ghali pradhama Ganesh manao	吉祥のとき、まづガネーシャを讃えなさい。						
Shankara Svana Bhavani Nandana × 2	シヴァ（シャンカラ）の子であり、女神パールヴァティー（バヴァーニー）の子。						
rukara ru me aaji abhi nandana	輝く御方を、今日こそ讃えよう。						
aaji kara ru me abhi nandana	今日こそその姿を讃えよう。						
sab deva mene ke gao manao	すべての神々が集い、歌い、祝福する。						
shubha ghali pradhama Ganesh manao × 9	吉祥のとき、まづガネーシャを讃えなさい。						
shubha ghali pradhama	いま吉祥のとき、ガネーシャを讃えなさい。						
shubha ghali pradhama							
shubha ghali pradhama Ganesh manao							
吉祥神ガネーシャについて あるいは歓喜天について							
ガネーシャ（Ganesh）はインドで非常に人気があります。クリシュナに次ぐくらいかもしれません。							
おそらく親しみやすい風貌と、単純に吉祥の神ということで現世利益につながる点が大衆に受けるのでしょう。							
ガナパティ（Ganapati）とも呼ばれわたしの実感ではこちらのほうが多いかもしれず、また親しみを込めて呼んでいる印象を受けます。							
シヴァとパールヴァティの息子で、顔は象、からだは人間、一本の牙と四本の手をもち、ネズミの上に乗っています。							
あらゆる障碍を取り除く神とされ、「障碍を除く神」という意味のヴィグネーシュヴァラ（Vighneshvara）とも呼ばれます。							
同時に富と繁栄をも象徴し、智慧と学問の守護者でもある。たいへんおめでたい吉祥の神です。							



いくつか代表的な特徴を紹介しておきます。

象の頭	頭がでかい、ということは賢いということで、智慧の象徴です。
一本の牙	象はふつう二本牙がありますが、一本折れている。だから犠牲や調和を象徴。
太鼓腹	大腹の者（Lambodara）の別をもつ。おおきな腹は豊かさと包容力の象徴。
斧	無知や障害を断ち切る力
縄	欲望や障害を縛り、正しい方向に導く力
数珠	智慧、精神性、呪術的力
お菓子	モーダカ。豊かさや幸福の象徴。
蓮の花	純粹さ、神聖さ、悟り。
蓮華座	どっかりとした座り姿勢。安定、内面の落ち着きや靈的成熟。

ガネーシャは仏教に取り入れられ、歓喜天（ナンディケーシュヴァラ）という名で日本にも伝わりました。聖天とも呼ばれます。日本では、男女の象が抱き合う姿（双身歓喜天）として造形されることが多く、愛や調和、繁栄を象徴します。夫婦和合や子孫繁栄の神として信仰され、おそらくは密教における性力崇拜の一表象なのでしょう。

